
おまもりやどり

虎太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おまもりやどり

【Nコード】

N5990Y

【作者名】

虎太郎

【あらすじ】

神社のお御籤で大凶を引いてしまった不幸な少年、石動 宗一郎。

彼は神主に唆され、三千円のお守りを購入してしまう。

翌朝、彼のお守りに宿っていたのはなんと生まれたばかりの神様

「天之子之命」だった。

身長10cmの小さな神様が生み出す、ハートフルはちゃめちゃストーリー。

神道バカの虎太郎がお送りする、二作目の神様シリーズ。
250人中、7位に入選した優秀作品です。
どうぞ、ご覧下さいませ。

巻 『不幸は突然にやってくる』 (前書き)

この作品は「15000文字以内」というお題で作られた作品です。

初めて虎太郎の作品をご覧になる方も、二度目になる方も、どうぞ、ごゆるりと神様ストーリーを堪能くださいませ。

(タイトルを見て「おまもり まりじゃねえか!」と思われた方もぜひ一度、ご覧下さいませ)

壱 『不幸は突然にやってくる』

物事はいつだって、こつちの事情など関係なく訪れる。

そして不幸は突然やってくるのだ。

気晴らしに天ヶ先神社あまがさきじんじやに立ち寄って、気まぐれにお御籤みくじを引いた。

ただ普通に、何気ない一日を過ごしていただけなのだ。

「何だ、コレは」

思えばこのとき、お御籤で大凶を引いてしまったこと自体が、これから続く不幸の始まりだったのかも知れない。

手の中にある紙切れから禍々まがまがしいモノが煙のように立ち上っているようだった。もっとも、その神様からの不幸なお告げを引いてしまった不幸な少年、石動宗一郎いしどうむねいちろうに靈感などあるはずもなく、それが目に見えたわけではない。

大凶 お御籤の中で最も悪いとされるお告げ、運勢のびりつけつ。大凶という禍々しい文字の隣には、可愛らしい花柄に囲まれて「あなたの花は黒百合くろむぎです」と書かれていた。

さらに隣には花言葉が。恐る恐る視線を横へと移す。

……ちよつと待て、黒百合の花言葉は？呪い？じゃないか！

何でそんな不幸な花を載せてあるんだ。

やんわりと彩いろなられている花柄でさえ恨めしく思えてくる。

『【運勢】大凶 夢も希望もありません。努力をすればする程、底無し沼にはまったかのように深い闇に沈んでいきます。ここはひとまず落ち着いて行動をして、良い運気が流れてくるよう待ちましょ』

逡巡しゆんじゆんの迷いなく手の中で紙クス同然に握りつぶすと、お社おしゃを背にして力の限り投げ捨てた。丸められたお御籤は弧を描いて、町の景色が広がる階段のむこうへと消えていく。

ざまあみる。

ふん、と鼻息を荒げて神社を後にしようとお御籤が消えていった階段へと足を踏み出した。

突然、足元がぐらりと揺れ、大きくバランスを崩す。自分の足の裏に大きな石があり、気づかず足を乗せてしまったときには、既に階段が目の前に迫っていた。

地面と空とが繰り返して視界に入ってくる。同時に全身に痛みが走る。

世界が八度ほど回った後、階段下の石畳へ背中を打ちつけてようやく止まった。

頭に浮かんだのは大凶の二文字。むしゃくしゃして、頭を掻きむしる。栗色の髪が宗一郎の心境を表しているかのように、乱暴な形になる。

「おやおや、どうなされました」

天を仰ぐ宗一郎の目の前にクシャクシャのお御籤を手にした、白い着物の男が覗き込んできた。

「ははあ、それはまた災難でしたねえ……………」

あらかた説明をし終えると、この神社の神主だと名乗る男は微笑みながら何かを差し出してきた。

神主の手の上には、赤や白の紐が幾重にも編み込まれたお守りらしきものがあった。

「お守り……………です、か？」

「その通りですな。ただし、その社務所（むせむせ）で売っているような代物じゃあないですがね」

神主は宗一郎へ顔を近づけると、にたあと笑いながらお守りを目線の高さまで持っていく。

「このお守りは代々、この神社に伝わる特別な祈禱を経て作られたお守りでしてねえ」

と、神主はお守りの紐を摘むと、振り子のように動かす。

「開運なんてモンじゃあないですよ。なんせ悪霊を払うための強力な護符しふなんですから。だから大凶なんて出ても、これを持ってれば関係ないですよねえ」

思わず生唾を飲み込んでしまう。喉から手が出る、というのはこの事だろつ。

今まさに、揺れ動くソレを掴み取るうと右手に力が入っているのだから。

「一万円」

「……高いッ」

「の所なんです、見たところ学生さんですよね？」

よれよれのズボンに大きくはみ出している白地の半袖シャツ。胸ポケットには宗一郎が通っている桜花学園おうかがくえんを示すバッチバッチが煌々くわんくわんと輝いている。

虚を衝かれて押し黙っている宗一郎を気にも留めず、神主は続けた。

「学割つていうのかな？ それで大まけのおまけ、三千元つてのはどうかねえ？」

「たか」

「これ以上は割引できませんなあ。それに……いらないうらないうんですよ」

神主は急に興味を失ったかのように、社務所へと踵かかとを返そうとする。

階段へ足をかけた所で、宗一郎の右手が神主の袴はかまを掴んだ。

「買う、買うよ！」

冷めた神主の眼に光が戻る。先程の態度が嘘のように微笑んだ。

「毎度ありい」

宗一郎の背中を見送る神主に、一人の巫女が近づいた。

「神主様」

「なんでしよう」

「また、お御籤の中身を替えましたね？」

「はて？」

「また、お守りを不当な価格で売り払いましたね？」

「はて？」

「あれ、安産祈願のお守りですよ？ 七百円の」

「ええ。でも、ちゃんと中の紙を入れ替えたのでいいじゃないですか」

「神主様 ！！」

その夜、宗一郎は買ったお守りをジツと見つめていた。

お守りを何処どこにつけようか悩んでいたが、やはり一番身近にある携帯電話に結わいつけた。

うん、何だか頼もしく見える。

宗一郎は目覚まし時計のアラームをセットして、携帯電話を枕元に置いた。

きっと明日には平穏な日常が戻っているに違いない。そう祈って宗一郎はゆっくりと瞼まぶたを閉じた。

き 『不幸は突然にやってくる』 （後書き）

階段を転げ落ち、さらには神主には誑たがひかされた宗一郎。

不幸続きの少年は、平穩が訪れるようにと、その胸に希望を抱き、眠りにつく。

翌朝、彼はその願いが永遠に叶わぬ夢だということに気づかされるのだった

次回 『神様も突然にやってくる』

どうぞ、ご期待あれ。

式 『神様も突然にやってくる』

宗一郎は毎日けたたましい目覚まし時計の電子音で起きていたが、その日は珍しくアラームの時刻よりも早く起きた。

「く……ああ」

深い眠りに入っていたのか、一度も起きることがなかったため目覚めは良好だ。

大きく背伸びをして枕元にある携帯へと手を伸ばしたとき、ふと可愛らしいものが宗一郎の目に入った。

「ん、くう」

携帯電話の大きさと同じくらい、もしくは一回り小さいくらいの女の子だった。

それが携帯電話の上で猫のように丸まっており、静かに寝息をたてていた。

白い着物に足首まで覆われた赤の袴……いわゆる巫女装束というやつだろうか。

髪は縮こまった身体と同じくらいまで伸びており、烏の濡羽色からすぬわばいろが水の上で揺らめくように、白い携帯電話の上に広がっている。

「んう〜」

初め、宗一郎はそれが人形か何かだと思った。

手のひらに納まるくらい小さな人間など、いないからだ。

しかし微かに上下する胸が『生きています』と語っていた。

その光景に呆然ぼうぜんとしていたが、寝返りをうつつ少女を見ると、胸の奥が妙にくすぐったくなった。

宗一郎は己が心の思うままに、右の人差し指で少女の頬ほおを突つく。

感触は とても柔らかかった。

女の子の身体は電気が走ったかのようにビクンと震えると、先程より一層縮こまってしまふ。

その仕草を目の当たりにし、小さい頃ハムスターを突いたときに

感じた、言い知れない感情が宗一郎の胸中に広がる。

さらに二回、突いた。

「く……うう」

四回ほど突いたあたりで、少女の額に筋が浮かび上がる。

それに気づかないまま宗一郎はもう一度指を近づけ 絶叫した。

「いつつてえ〜!!」

慌てて指を引つ込めると、携帯電話の上で犬のように唸る少女の姿があった。

痛む指を見ると、小さな歯形がついていた。

「痛いのはこっちのほうさ。酷いね、人が気持ちよく眠っているのに、不埒だよ」

自らの袖で下半身を庇い、小悪魔のような笑みを浮かべた。

着物が弛んで胸元が露になった姿は、普通、健全な男子にとって目に毒な光景である。

が、目の前の少女は小さすぎる上に胸が板であるため、虫眼鏡でも持ってこないと色気の欠片さえ感じられない。

「いや……そもそもお前、誰なんだよ。しかも人の携帯の上で……なにしてんだ」

「ん？ 『けーたい』……」

およそ重力というものを感じさせないような身のこなしで、ふわりと浮き上がるように少女は立ち上がる。

「これかい？ 『けーたい』というの」

青竹踏みのように、何度も携帯電話を乱暴に踏み荒す。

「あ」

すると、少女の足元から光が現れ、携帯電話を照らした。

光の泉、と言えはいいのだろうか。白き光源が少女の両足の間で明滅している。

携帯電話の光ではない。

きれいだなあ、と思った矢先、何かの弾ける音が携帯電話から発せられた。

先程まで眩しかった光も、急速に失われる。

「やっちゃったみたいだ」

ばつが悪そうに、少女は宗一郎を見上げてそう言った。

背中にひやりとしたものを感じた宗一郎は、少女が携帯電話の上に乗っているにも関わらず、携帯電話を開いた。

ディスプレイの向こうで「おわっ」と悲鳴ひめいを上げて落ちてしまう少女。

その悲劇ひげきに眼もくれず、宗一郎は目の前の惨劇さんげきに大声を上げた。

「うわあああ！ 携帯が……」

液晶画面に無数のひび割れ線が走っており、電源ボタンを押しても反応はなかった。

ディスプレイのてっぺんから、申し訳なさそうに少女は顔を覗のぞかせた。

「ご、ごめんよ。つい力が……」

「力ってお前、一体何者だよ！」

「か 神だ」

式 『神様も突然にやってくる』（後書き）

宗一郎の願っていた平穏な日常は、ただ一人の少女によって打ち砕かれた。

体長10cm、黒髪ロングヘアに巫女装束。
自称神様のこの少女は、いったい

次回 『天之子之命』
どうぞ、ご期待あれ。

参 『天之子之命』前編

「あゝあ、本当に壊れちゃったよ」

学校へ向かうため電車を降りて、宗一郎は大通りを歩いていて。周りには多くの会社員やら学生やらがそれぞれの目的地へと向かっている。その中に宗一郎もいた。

「うう、謝ったじゃないか　キミも意地悪いじわるだなあ、いい加減許しておくれよ」

携帯電話の上で少女　もとい神様が、正座のまま縮こまっていた。

「それで……ええと、なんだっけ。名前」

「天之子之命《あまのしのみこと》」

「そうそう、あまの……何だっけ」

「天之、子之、命！　遠回しに人を虐めるのが好きみたいだね、キミは」

宗一郎の目の前で頬を膨らます自称『神』の少女、天之子之命。

「それで……アマノ、シノ、ミコト？　それ以外は何も分からないのか」

「……うん、残念ながら。僕は神と言ったけど、神階しんかいは下しもの下。キミたちが思い浮かべるような、全知全能ぜんちぜんのうの存在じゃないんだ」
発現生まれたしたばかり　そう彼女は言った。

携帯電話が壊れた後の……今朝の出来事を宗一郎は思い返した。

・・・

「何故なげ、ここにいるんだらうね」

自らを神と名乗った少女は、不思議そうに宗一郎へ聞いた。

「僕は、神具しんぐとして祀まつられている刀に宿るべきだったんだけど何故、僕はここにいるんだい」

お守りの上で、まっすぐに宗一郎を見上げる天之子之命。少しだけ焦りの色が見えた。

「僕はそこに宿神具らなければならぬんだ。ねえ、どうすればいいのかな」

「どうすればって……」

宗一郎はわけが解らなかつた。朝起きたら小さな少女が寝ていて、触ったら噛み付かれて、携帯電話は壊されて、あげくの果てにどうすればいいかときたのだから。

「じゃあそこに行けばいいじゃないか。その、宿るべきシンゲ？」

へ

「行けたら苦労はしないんだけどね」

見ててよ、とお守りの上で歩き出そうとする天之子之命。お守りから十センチほど離れたかと思うと、天之子之命の眼前でバチバチと火花が散った。

見えない何かに阻まれたのか数歩下がり、肩をすくめる。

「ほらね。これ以上はお守りから離れられないんだ」

「どうして、なんだ？ どうして離れられないんだよ」

「恐らく、なんだけど……」

顎に手をあてがい、うーんと考える。

「……誤まちって宿あってしまったみたいなんだ。このお守りに、ね」

どこか諦めた口調で、天之子之命は足元のお守りを指した。

参 『天之子之命』前編（後書き）

手違いによってお守りへ宿ってしまったという神様『天之子之命』

生まれたばかりの彼女は、自らの境遇に戸惑っていた。そんな彼女を見越し、宗一郎は何気なく話題を変えていく。

そして彼女は、新たな名前を与えられるのだった

次回『天之子之命』後編

どうぞ、ご期待あれ。

肆 『天之子之命』後編

「しかし、天之子之命って言いにくいな」

あまりにも落ち込んでいる天之子之命を見かねて、話題を変えるよう宗一郎は心がけた。

神様に気をつかうというのも変な話だ。

「天は空という意味で、高天原の一字を貰い受けたんだ。子は、その高天原で生まれた神を表すとして付けてもらった。僕は嫌いじゃあないな」

「じゃあ天は御天道様の天で、子は子供の子か？」

「うん。命は生命の命だけど、神を呼ぶときにはわざと抜く場合もあるんだ。言いにくいなら命を抜いてもらってもいいよ」

「じゃあ……天子ってのはどうだ？ ……無理やり天って読まなくていいだろ、別に」

口にした後、少し馴れ馴れしいことをしたなと宗一郎は思った。

まるで俺が彼女をあだ名で呼びたいみたいじゃないか。

そんな宗一郎の思いとは裏腹に、彼女は携帯電話の上でキラキラと瞳を輝かせていた。

「てんし……天子。ふふ、良い響きだね」

どうやら気に入った様子で、何度も頷いては「天子」と名前を確認するように自分に言い聞かせていた。

「どうやら、キミからも良い名を貰ってしまったね。嬉しいよ」
てへへ。気恥ずかしいのか、頬を掻く天子。

「そういえば、天子……本当に見えてないんだな、他の奴らに」
ふと、宗一郎は辺りを見回した。

大通りを行きかう誰しもが、前を向いて歩いている。

時折、宗一郎と目が合う通行人もいるが、すぐに視線を戻してしまふ。

誰一人として、携帯電話の上に座っている天子に、気づかなかっ

ただ。

「ほら、僕も一応は神だからね。人間に神が見える必要はないから、始めから見えないようになってるのさ。キミの場合は 多分、これのおかげかな？」

歩く振動でゆれるお守りを指差す。

「また、お守りか」

「そう、そもそもコレが空っぽなのが、おかしいんだ」

「ちょこんと正座をしたまま、天子は説明を始めた。

「もともとお守りには加護の力が宿っているんだ。その力は微弱ではあるけれど、多少の悪霊や、それらがもたらす……いわゆる不幸な出来事から守ってくれるんだよ」

指を遊ばせながら、天子はすらすらと説明する。

その姿は神様というよりも神道好きの巫女さんだった。

「だけどね、このお守り……宿ってみて気づいたんだけど、中は空っぽ 空洞だったんだ。こんなの、ただの飾りよりも厄介だよ。

僕が宿らなかつたら、最悪、悪霊が入っていたかも知れないから」

平然と恐ろしいことを言つてのける小さな神様。

「よっぽど適当に作ったのか、それとも神様なんていないと思つている人が作ったのかな。これを売つてた神社には、近づかないほうがいいよ」

「はい、神様」

「なんだい、急に？ せっかくキミが付けてくれた名前があるんだ、そつちで呼んでおくれよ。て、天子 ってさ」

へへへ、と照れ笑いをする天子。

こいつは想像以上に馴れ馴れしいな、と宗一郎は思つたのだ。

肆 『天之子之命』後編（後書き）

宗一郎から貰った名前を、嬉しそうにかみ締める『天之子之命』
こと『天子』。

しばしの時を共に過ごす中で、天子は少しずつ常識を覚えていく。
そして、天子は問い詰めてしまう。彼と、彼の周りのことを

次回『神様、トモダチって何だ？』
どうぞ、ご期待あれ。

伍 『神様、トモダチって何だ？』

神様がお守りに宿って三週間。

どうやら神様はテレビが大層のお気に入りのようで、暇さえあればテレビの観賞かんしょうを催促さいそくするようになった。

お守りから遠くへ離れられないため、一人でリモコンを操作することも敵わない天子。

必然的に、宗一郎がいなければテレビを見られない。

なんで無理矢理テレビを見なきゃいけないんだ。

宗一郎は「面倒」の一点張りで拒み続けた。

始めのうちは、ぶーぶーと文句を言うだけの天子だったが、最後には「リモコンを言霊に代えて携帯電話の中に宿らせよう」と言い始めた。

宗一郎は携帯電話を壊された一件を思い出し「天子ならまた壊しかねない」と頭に過ぎった。そのため、天子と一緒になくなるとテレビを見るハメになってしまった。

「ねえ、キミ」

「何だよ」

天子はテレビに釘づけだった。映されているのは、昨シーズン人気を博した学園ものの青春ドラマだ。男同士の深い友情を描いた作品らしい。

再放送が決定したらしく、たまたまテレビをつけたら一、二話が放映されていた。

宗一郎はあまり好きではなかったが、天子が見たがっていたので一緒に見ることにした。

天子は、後ろに座る宗一郎へ問いかける。

「トモダチって何か、わかるかい？」

小さな口に入るよう、細かく砕いたポテトチップスをほお張りながら、天子は答えを待つ。

「動物で例えると群れ、だ」

「動物は自分たちを脅かす存在を恐れて、群れをなすものじゃないか。じゃあ、人間たちは何を恐れて群れているんだい？」

天子のその知識は先日、社会科の先生が授業中に語っていた内容だった。

誰も聞いてなかったのに、聞いていたんだな。俺と同じで。

宗一郎は苦笑し、口を開く。

「多分、それは『孤独』を恐れているんだと思う。人間は寂しがり屋なのさ、一人でいると寂しくて死んじゃうんだよ」

「ふうん……じゃあ、キミは寂しくないのかい？」

ぴくり、と宗一郎の肩が跳ねる。胸に針が刺さったかのように、心が痛む。

風呂やトイレといった場所を除いては、常に天子と一緒に過ごしていた。

修理から戻ってきた携帯電話に、お守りをつけたからだ。

だから学校も例外ではない。

そのため、天子は気になったのだろう。

ドラマの中では主人公と友人がいつも教室内でふざけあい、笑いあっている。

その光景を、天子は宗一郎の身近で見たことがないからだ。

宗一郎には、そう言った友達がいなかった。

男女共に入り乱れて騒ぎあう教室の中で、彼は一人だった。

いつも宗一郎は窓際で景色を眺め、そんな彼をみる天子。それが二人の学校生活だった。

「寂しくない」

ポテトチップスを咀嚼する音だけが、耳の奥で空しく響く。

「そっか。僕は、寂しいと思っちゃうかな」

手についたポテトチップスをペロリと舐めると、天子は振り返った。

「僕は一人だと寂しい。キミがいつも一緒にいてくれるから、今は

寂しくはない、かな」

テレビはちょうどコマーシャルに入ったようで、天子はグーツと背伸びをすると、身体も宗一郎へ向きなおした。

「きつと……宿るべきはずの神具カに宿っていたとしたら、僕は寂しかったと思うよ。一人で永遠に、誰とも言葉を交わすことなく、人々の信仰しんこうを受け続けるんだ」

淡々と天子は語る。

今、俺が聞いている言葉は神様の 天子の本音だろうか。

「でも、それが神なんだよね ああ、僕は幸せ者だなあ。こうして毎日、キミと楽しく過ごせているのだから」

曇り一つない笑顔を向けられた宗一郎は、あることに気づいた。

そうか。天子と自分は似たもの同士だったのだ、と。

友達が 心を許しあえる人がいなかった。

なんだか急に胸がくすぐったくなる。

それは、自らが友達みずかというものを遠ざけていた宗一郎が、初めて抱いた感情であった。

伍 『神様、トモダチって何だ？』（後書き）

お守りに縛られ、籠の鳥同然の天子は言う。「僕は幸せ者だ」と。その言葉に戸惑いを覚える宗一郎だが、同時に彼の中で不思議な感情が沸き上がる。

言い知れぬ感情が彼の心に纏わりつく。そして彼は思い出してしまふ。その感情の正体に

次回『おまえと出会って』
どうぞ、ご期待あれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5990y/>

おまもりやどり

2011年11月21日23時52分発行